

寺崎武男の友人

みなみ くんぞう

南 薫造 1883-1950 画家

東京美術学校で武男と同期。卒業後、イギリス・フランスに留学。同校教授。文展に連続入選、帝展美術院会員。

<1907(M40).9.16> No.C2

寺崎武男（ヴェネチア）→ 南薫造（安芸）

「…私はこの頃、ローマにきた昔の日本の使節について描こうと、今多くの材料を得つつあります。又伊太利の歴史家、上流の人々、も賛同してくれて、多くのたすけを得ています。宗教画を描こうとするなら、当地に来るといい。当地に史料をさぐり、多くの趣味深き古跡を見よう。世界的の日本を画こうよ！…自分で新しい美術を生まんとするなら当地に来るといい…」

<年不明.9.2> No.C10

寺崎武男（ヴェネチア）→ 南薫造（ロンドン）

「親愛なる兄の来往を満身の喜びを以て祝します。遠き旅の後には十分静養して、其の後大なる元気を以て盛りあげてください。暗々なる日本の美術界に光を与えるものは君の外ではないと信じている。僕の君に対する理想を現実ならしめて下さい…」

南薫造や平井武雄は、寺崎武男と東京美術学校時代の同級生である。卒業後もそれぞれ留学し研鑽を重ねながら、画家同士として、良き友人として、生涯にわたり親しく交流が続いたことが読み取れる。特に、平井のハガキは最も数多く残っており、頻繁に文通していたことがわかる。



ひらい たけお

平井 武雄 1882-1943 画家

東京美術学校洋画科で武男と同期。卒業後渡米し、ニューヨークで洋画修業。帰国後、日本水彩画会創立。関東大震災の罹災会員救済のため、支那・仏印・ビルマ・印度で展覧会開催。女子美術専門学校講師。

<1908(M41).8.?> No.6

平井武雄（ニューヨーク）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…遊ぶといえは早く君や南氏に遇いたいね。語りたいね。今では君は伊太利語は余程出来てこよう。僕の英語はまだからだめよ。…」

<1909(M42).4.?> No.14

平井武雄（ニューヨーク）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…僕等画かきという職業は一手何時出来上るという切りのない仕事だが人類の自然を欠いてまでも自身をギセイにする程のことはないと思う。しかし何処の国へ行っても自由に安全に食べ得、金を取るこの出来るといふ職ではないのだから或人の如き青年中に急いで結婚するのは僕はせん考だ。…」

<1916(T5).10.28> No.30

平井武雄（伊香保）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…信仰生活之か僕を病者でよくなる唯一の法だと僕は知ったのです。そして今更ながらクリスチャンになったので心強いのです…」



1919(T18)年 武男宛ハガキ裏面の平井スケッチ
伊香保にて、南薫造と永田二郎（美校同級生）の将棋の様子

